

(Ⅷ) 編集後記

人工衛生の時代といっても人間が現在直ちに月や火星に旅行できる訳ではない。科学の進歩は目醒しいといっても人間は己が身につけている唯1個の生きた細胞を作れる迄に到っていない。天地の悠久、神の創造を考えると、人間など何一つしていないようにも思われる。秋田県衛生研究所報の第4輯ができ上がった喜びは私共にとって大きい、今後とて苦難の荊が蔓らぬ訳ではない。昨年度は印刷製本費が無かったので、今回は2ヶ年分を組むことにした。それだけ歓びが大きいとも言える。

来年のことをいうと鬼が笑うというが、しかし科学者は太古と遼遠たる未来を考える。今日はストーブで暖をとるが、200年後日本に石油石炭が全く尽きた場合は日本人の子孫はどうなるか、というような事を考えるのは無駄だろうか。衛生学にしても人間が生る限りなくとも済むものではないと思う故に、そうしてより多く生の喜びを味うためにその発展を期し度い。もしも私共の業績がバベルの塔の崩れることのない礎石の一つになるならば、面目これにすぎたるものがない。それを希いつゝこの第4輯を世に送る次第である。(児玉記)